

小学校教諭による日本語教育等の現状 ～日本語指導を行う国際教室の視点から～

The Present Situation of Japanese Language Instruction
by Public Elementary School's teachers

～From the Point of View at the International Classroom's Japanese Language Instruction～

島袋盛吉 SHIMABUKURO, Seikichi (Principal)

恩納村立恩納小学校 Onna Elementary School, Onna Village

棚原直樹 TANAHARA, Naoki (International Classroom Teacher)

恩納村立恩納小学校 Onna Elementary School, Onna Village

【キーワード】 日本語習得、母国語（英語）保持、特別の教育課程、個別の指導計画

1. はじめに

本稿は、2015 年 10 月 9 日に開催された大養協第 46 回大会のシンポジウム「教員養成計画について考えるー求められる教員の資質と教員数とはー」において、パネルディスカッションで発表した内容をまとめたものである。同シンポジウムの趣旨では、沖縄の事例などをもとにして、今後、養成課程が育てるべき人材について、どのような知識を持った人を、どの程度の人数、養成する必要があるか、であった。公立小学校の日本語教室担当を代表して、本校の国際教室の事例を紹介し、日本語教室（国際教室）担当に求めたい能力と本校における国際教室のこれまでの成果と課題を載せて、最後に、大学の日本語教員養成課程への期待を述べたい。

2. 国際教室新設の経緯など

恩納小学校は、恩納村のほぼ中央に位置し、村内 5 校の小中併置校の中で、最大規模の児童数の在籍を有している。校区に「万座毛」、「村役場」、「沖縄科学技術大学院大学（以下、OIST）」などがある。

平成 23 年度の沖縄県教育委員会と OIST 関係者による協議の中で、OIST 開学に伴う外国人子女等の就学、日本語習得、母国語保持の必要性が共通認識され、平成 24 年度の OIST 子女の受入校として恩納小学校

が指定され、国際教室も新設された。

国際教室新設初年度の経営方針としては、日本語を母語としない OIST の子女のみと限定して受け入れることが考えられていた。しかし、恩納村在住の外国人が 500 名余りと多く、国籍も 56 カ国と多国籍であり、恩納小学校に在籍する国際児も多かったことから、国際教室に通級できる児童を OIST 子女と限定せず、日本語教室の要素を中心とした経営方針、つまり、日本語習得が必要である児童も通級可とした。

ただ、国際教室という名前になった理由は、OIST の開学に合わせて新設したこと、OIST 子女の英語力の保持も国際教室で指導すること、さらに、OIST が国際的に開かれた教育機関であることで、ネーミングが国際的である必要があるなどである。

3. 国際教室の経営方針

国際教室に通級する児童は、基本的に日本語が理解できなくて、転入してきた時には、日本の文化や環境に慣れておらず、学校生活においては、両親から離れることなどもあり、非常に不安な状態である。

そのため、通級児の学校生活面の適応、日本語・教科学習などの指導や支援を行い、かつ、楽しく充実した学校生活が送れるように、学級担任との連携を深め、学習進度を調整して指導すると共に、在籍学級での「居

場所」を広げる支援を行う。また、OIST 関係者や家族との連絡調整を密に行い、連携を深める必要がある。

4. 日本語指導を要する児童のバックグラウンド

現在、国際教室に通級する児童数は6名であり、英国や米国出身が4名、ロシア語圏が1名、日本国籍が1名となっており、ほとんどがOIST 子女である。OIST 子女は、両親のどちらかが、OIST 職員や研究員になったことにより、転入してきており、その際の日本語力は全く理解できない状態である。文科省の「日本語指導のカリキュラム」にある通り、①サバイバル日本語、②日本語基礎プログラム、③技能別学習プログラム、④日本語と教科の統合学習 (JSL カリキュラム)、⑤教科の補充プログラムの順で指導している。現在の通級児童の日本語力は、6 名とも来日の年数が違うことや出身国の違いなどにより、異なっているが、6 名とも日本語で指導して、日本語で理解し、日本語で受け答えできる状態である。1 名のみ、基礎プログラムと技能別学習プログラムの段階にあるが、残り5名は、最終段階の教科の補充プログラムにある。

5. 国際教室における指導の実際

国際教室での日本語指導は、「日本語指導のカリキュラム (文科省)」に基いている。既述の①～⑤の段階で指導し、「特別の教育課程」の編成と実施計画を行っている。指導計画は

① 学校設置者に提出する指導計画

② 学校内で作成する指導計画

を作成し、それに基づき、指導している。

日本語が全く理解できない通級児にあっては、来日直後から、遅くとも半年以内で、日本語初期指導教材を活用して指導し、日本語を聞くことが出来て話せる段階までの日本語力を身につけさせている。

6. 国際教室設置 4 年目の成果と課題

国際教室が設置されて4年目となり、文科省主催の教員研修センターにおける日本語指導者研修会や、県内日本語教室担当の先生方、琉球大学の先生方から多

くのことを学ばせてもらった。4 年目の成果と課題を述べる。

(1) 成果

①日本語初期指導段階において、スムーズに日本語を習得させる効率的な指導の体制ができた。

②「特別の教育課程」によって、在籍する学級の授業に参加できる日本語力をつける日本語指導のカリキュラムが整った。

③OIST 職員や通級児童の保護者と密なる連携を取り、「国際教室」の特色をいかした教室経営ができています。

(2) 課題

①DLA (外国人児童生徒のための対話型アセスメント) の実施方法、その結果を活かした授業実践

②JSL カリキュラムの授業づくりを活用した授業計画の作成 (「トピック型」と「教科志向型」の詳細な授業計画)

③国際教室の通級児童数が増加した場合の対応

7. さいごに

本校の国際教室は、県内の日本語教室とは少し違った特色があるため、人事面から、国際教室 (日本語教室) の担当教諭に求めたい資質能力を述べたいと思う。

① 英語を母語としない児童に対しても、日本語を教えることができる専門的な能力
(文科省主催の日本語指導者研修会等の修了者が望ましい)

② 異文化理解、自国文化理解、平和・友好、コミュニケーション等の資質・能力

③ 外国文化を背景とする保護者に対して相談・説明・説得ができるとともに、適時、正確な情報を英語で発信できる能力

最後に、「教員養成課程について考える」という素晴らしいシンポジウムにパネリストとして参加させてもらったので、主催者に感謝申し上げる。日本語教師としての資格を兼ね備え、かつ小学校教員免許も有する優秀な教師が、大養協の大学生等から多く現れることを期待する。
(了)